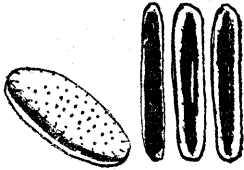


エリクソンと幼児教育 (16)



仁科 弥生

同一性の形成 アメリカの場合(1)

今回は、アメリカにおける青年たちの同一性の形成について、エリクソンの見解を中心にして話をすすめてゆき、

エリクソンによれば、アメリカ人の同一性は次のように要約される。アメリカの集団同一性は、開放的な移民の道を排他的な伝統の島というような、相矛盾する両極性をはらむ性質で特徴づけられる。その他の両極性として、たとえば積極的な国際主義と挑戦的な孤立主義、騒々しい競争と自己抹殺的な協力などをあげることができ。そして、このような両極性で示される二者択一に個人は直面するが、彼が慎重に自律的選択をなんらかの私たちで暫定的なものとして保ちつづけることができるかぎり、その集団同一性が彼の自我同一性を支えることになる。

たとえば、定住生活と移住生活という二つの対照的な極がある。つまり一方には、村や町に根をおろし、人々

は地域社会の発展に努力するという生活がある。しかし他方には、「隣家の煙突の煙が見えたら、移動の時である」というスローガンを生みだした世界がある。しかし、定住者はそこを動かすと言われるのを望まないし、移住者は移動を続けるように命じられるのを好まない。

彼らはどちらを選ぶかはもっとも私的で個人的な決断によるべきであると考えている。つまり、どこに留まっていようと、どこへ行こうとしていようと、いつでも、自分の意志で、そこを立ち去ることも、反対の方向へ行くこともできるといふ保証があつてはじめて、その集団同一性は個人の自我同一性を支持することになる。したがつて、潜在的な可能性としての正反対の選択の機会が絶たれると、彼らは不安におそわれ、彼らの同一性は危機にさらされることになるという。

さて、アメリカ人の同一性の一つに、自律と自発性の同一性がある。アメリカの大陸の広大さや、その自然のきびしさや野性の誘惑などがそれを作りだしたとエリックソンはみる。すなわち、アメリカの開拓時代において、

男たちは新しい辺境へと旅立ち、自分の腕一本で成功した。そこに「どこへでも行き、どんなことでもする」という独立独歩の男の同一性が生まれた。移民の娘たちは、幼い子どもの頃に祖国では学ばなかった行動の規範を新しく身につける努力をした。こうして、自ら形成したパーソナリティをもった女性（つまり、男性の理想にもとづいて作られた女性ではない）が、独立独歩の男に対応するものとして出来上った。そうして、歴史的には、明確に定義されすぎた過去は捨て去られ、不確実な未来が強く求められた。地理的には、移住することが常に存在する事実であつた。社会的には、運を天にまかせて事を行なうところに好機があり、社会的移動のルートを最大限利用するところに幸運があると信じられるようになった。

たしかに、このような建国初期の精神が、現代においても、アメリカ青年の基本的性格を規定しており、また青年には、たえず独立への、大人になるための圧力が働いているといえる。しかし、その建国当時の前提条件そ

のものが、独立の方法でその国の発展はもとより、国民の同一性の発達を複雑なものにする。たとえばアメリカ史におけるあの両極性に象徴される二律背反が、現代の青年たちを情緒的、かつ政治的短絡傾向に走らせている。また、丸太小屋の生活から超近代的な高層建築の世界へと急速な変貌をとげる過程で、二代、三代にわたる世代の生活はそのような急激な変化に適應をせまられた。子どもたちは成長の過程でしばしば価値観の不連続を経験することとなった。彼らはさまざまな同一性を何とか調和させようと努力するが、これらの同一性の変動はあまりにも急速であり、あまりにも鋭く対立しあっていた。こうして、今日、大人や子どもたちの患者の中に同一性の喪失が顕在化するようになったとエリクソンは分析している。

次に、その同一性の喪失についての考察の中で、エリクソンが指摘したいいくつかの問題に触れてみたい。

アメリカの精神医学関係者たちの間に、彼らの患者の背後には、必ず冷淡で、支配的な「母親」が存在すると

して、そのような母親の「拒否的態度」が情緒障害の一つの原因であると考える傾向がある。これに対して、エリクソンは、そのような母親像は、親としていくつかの致命的な矛盾をかかえている母親が示すさまざまな特性の合成図であって、そのような特性のすべてが一人の現実の母親の中に存在しているわけではないという。また、どんな女性もそのような母親になりたいと意識的に望んでいるわけでもない、彼は女性を弁護している。そして、さらにその「母親像」の起源が、実は、さまざまな国からもち込まれた多くの伝統を基礎にして、女たちが新しい共通の伝統を發展させ、また、それを土台にして家庭生活の様式を築き、子どもたちを教育しなければならなかったというアメリカ建国の歴史の中にあることを明らかにしたのである。

すなわち、自由を新天地に求めてやってきた男たちは、新しい仕事を次々に求め、それに挑戦することに熱中していた。したがって、定住生活の習慣を確立させることが女たちの責務であった。そして、きびしい自然を

切り開いて築いた苦しい経済状態の中で、彼女たちは生活に繊細なやさしさを与えたのであった。

また、彼女たちには、堅苦しい定住生活とたえず変化する移住生活という両極性に直面することになる未来にそなえて、子どもたちを教育するという仕事もあった。

すなわち、辺境の魅力や移動への誘惑をしりぞける決意をもち、しかも一旦、辺境へ出かけなければならなくなると、同じように強い決意で出かける勇気をもった人間に子どもを育てる必要があった。そのため、保護的な母性主義が未来の辺境開拓者を軟弱な人間にしてしまうことを恐れて、女たちは、アングロ・サクソン流の育児法をさらに発達させて、きびしく「拒否的」な態度をとるようになったのである。したがって、それは、建国初期のアメリカの母親たちが、無意識的な適応の仕方であり、この大陸の歴史的状況に反応した結果の所産であり、それはとりもなおさず、かつての文化的美德であったと解すべきであるとエリクソンはいう。

また、独立独歩の男や、自力で作らあげたパーソナリ

ティの女というイメージにびったりするような人々には保護的な母親の愛情はそれほど必要ではなかったともいう。それに、実際に子どもにそのような母親の愛情を受けた人々は、後には自らそれと縁を切らねばならなかった。或は、拒否的な母親が存在しなかった場合はそれをでっち上げねばならなかったほどである。なぜなら、アメリカの民話の一つ、ジョン・ヘンリー誕生の物語の中のジョンが、途方もない食欲を阻止されて、大きな不平を抱いて人生を始める話に象徴されるように、アメリカでは「不平不満をもつこと」が歴史的にきわめて重要なことであり、強く激しく変化する世の中で、自分の足で立つためには自分自身の苛立ちで自分を支えていかなければならないからである。

エリクソンは、母親の拒否的傾向を一層助長した清教徒主義の影響にも注目している。清教徒主義は、もともと人間の強い個性や欲望を抑制する価値体系であったが、アメリカ史の短い流れの中で、住民の移動や、無限の移民政策、産業化、都市化などの影響をまともになら

けて、自衛上守勢をとらざるをえなくなり、それはますます剛直なものになった。そして、血の気の多い人々の肉欲を抑えたばかりでなく、夫婦関係も含めて官能性を罪悪視するようになり、さらに育児やしつけの領域にまでその冷たさを拡げていったのである。その結果、母子の間の情緒的緊張はますます高まった。子どもたちは母親から肉体的感覚の十分な満足を与えられなかったばかりでなく、官能性の良い面を愛することを学ぶこともできなかつた。こうして人生への不信を学ぶことになつたとエリクソンは説明している。

その上、どんな独裁にも屈服しないという自由の觀念に取りつかれた男たちは、自由の身に生まれた息子、子の役割を演じつづけた。そして、家庭や教育の場における支配者としての地位と責任を放棄し、女たちに母親であり、同時に父親であることを強制したのであつた。アメリカの母親中心主義の背景には、このような事情もあつたのである。そして、エリクソンは、この問題と関連つけて、アメリカの父と子の友愛的関係をも論じている。

すなわち、そのような夫に失望した母親が抱いた男性の理想像は、彼女の父親、つまり強くて、精力的に働く祖父であつた。それを母親が息子に無意識に伝えるので、少年の抱く男性の理想像は日常生活で一緒に暮らす父親に結びつくことは稀であるという。その結果、幼い日のエディプスのイメージ、すなわち圧倒的に大きく偉大な父親であり、母親を所有する男であり、息子が競い、打ち負かさねばならない相手というイメージは、祖父の神話と結びついたものとなる。したがって、父親は比較的息子の憤りの矢面に立つことから免れる。そして兄のような存在になるという。

そればかりではない。アメリカのような移民の国では、子どもたちは常にその親たちよりも新しい社会へのすぐれた適応力をもっているので、親を軽視する風潮が生まれやすい。また建国以来わずか二〇〇年という短い歴史の中で世界最強の国家へと発展したその速度と技術革新に対して、子どもたちの方がより大きな親和力をもっている。親たちはその進歩に追いつくことができなく

て、むしろ息子たちからそれを学ばねばならなかった。

このような状況のもとでは、父親は子どもの友人とはなるが、決して専制君主にはなりえなかったのである。ここにも、我妻洋も指摘する現代のアメリカの青年にみられる傾向、つまり、彼らは父親を自分たちと平等な立場にある存在とみなし、「仲間」同士として意見を交し、行動をとにもする傾向が育つ土壌があったのである。また、このような反権威主義が、家庭のみならず、広く、政治的、社会的態度として発達し、これがアメリカの民主主義の心理的基盤となつていともいわれている。ここで思い出されるのが、最近、報道されたアメリカの民主党のエドワード・ケネディ上院議員の八四年の大統領選不出馬の話である。彼は「家族たちの反対」を理由に不出馬を見送ることを公式表明している。その理由について、勝算が微妙であることからの決断であろうと取りざたされているが、勿論、ここでことの真相を問題にするつもりはない。ただ彼の場合、「家族の反対」といっても、夫人とは別居中であり、その発表の席に同席した家

族は子どもたちであった。このように「子どもたちの反対」を、たとえ人々がそれで納得するはずがないにしても、少なくとも表向き理由としてあげる彼の意識の中に私はきわめてアメリカ的な父親のポーズを読みとり、興味深く感じた。

さらに、エリクソンは、臨床経験を通して、次のような注目すべきアメリカ人の傾向を見いだしている。すなわち、情緒障害をきたしている人々には、母親に捨てられたという心の傷があり、無言の不満があることである。また、正常な男子についても、彼らを精神分析してみると、彼らは心の奥底では、自分を挫折させたことについて母親を責めているということである。その場合、エディプス・コンプレックスにみられる型通りの母親をめぐる父との敵対というあの特定の意識は殆どみられない。そして、この手法でさらに深く探っていくと、必ずその根底に、決定的な自責の念があるという。それは、自分は独立しようとしたあまりに、母親を捨てた子どもであったという自責であるという。

この分析は、母を捨てたと確信したときに、はじめて子どもは自立に近づくことができることを示しており、また、単に不満としてではなく、それを子どもの側の罪として自覚するところに「個」の確立があり、成長があることを示唆している。つまり、その罪悪感をいわばこの支点にして、社会の中で生きていかなばならぬことの自覚にすすむ自我の発達の筋道がそこに明らかにされていると思う。

それにしても、母を捨てることによってかち取っていく自立の道はけわしく、またそれには深い罪悪感がつきまとうのである。その心情を端的に表わしたのがカウボーイのうたう歌であるとエリックソンはいう。彼らは、追われる仔牛と同じように、帰っていく道がないということを一貫して歌っているのである。

お前には父親もいない、母親もいない、
お前がはじめて一人できまよい出たとき
お前が彼らを見捨ててきたんだよ、
お前には妹もいない、弟もいない、

まるでカウボーイと同じだよ、
家から遠く離れてしまつて。

(『幼児期と社会』)

ここには「愛情に対する信頼を否定し、信頼の必要性を否定する」という、かたくなまでのパラドックスが表現されている。したがって、それは人間の独立の優しくもせつない宣言となる。」とエリックソンは述べている。また同時に、彼は、「拒否的な母親」の存在を必要とした、「ある程度の喪失と孤独に耐えることを学ぶべきであり、女々しい男にみえることは危険なことである」という考え方に、このように深い歴史的根拠があることも明らかにしたのである。

ところで、この喪失とパーソナリティの発達の問題を、江藤淳は彼の『成熟と喪失——“母”の崩壊——』(一九六七年)の中で文学的な課題として問うている。そして、そのあとがきの中で、その視点の設定にエリックソンの『幼児期と社会』が深くかかわっていることを彼自身述べている。

その評論の中で、江藤は、エリクソンのとらえたアメリカの母子関係の対極にあるものとして、日本の母親と息子の肉感的なほどに密接な関係をあげている。そして日本の母と子の密着ぶりとアメリカの母子の疎隔ぶりの間には、ある本質的な文化の相違があると指摘している。つまり、カウボーイたちは、父性原理の思想をいだいてヨーロッパから新大陸へ渡ってきた者たちの子孫である。母性原理に支配されるわれわれ農耕社会の母子関係は当然アメリカのそれとは異なるものであるというのである。彼によれば、日本の母親は、わが身の分身である息子が自分とはちがった存在になっていくことに耐えられない。そして成長して自分から離れていく息子に対して、裏切られたと感じて、うらみを抱く。「このことは逆にいえば日本人の生活全般に及ぶ母親の影響の強さを物語るものであろう。これは勿論、「家」の中の母親の位置に由来しているという点で、農民的、定住者の的な感情とすべきものである。息子は「家」の中で、先祖伝来の田畑を守って生きなければならぬ。彼は放

浪するカウボーイのように孤独であってはならず、母に對するように密接に血縁とつながり、母に對するような濃い情緒で大地に結びついていなければならない。」と日本の母と息子の粘着性の高い関係を文化的な背景から説明している。そして彼は、日本の「近代化」がそれに及ぼした影響に言及している。すなわち、「近代化」は、学校教育制度の確立というかたちで社会階層の間の壁をとりはらい、「教育」によって「出世」する道を開いた。つまりよい「教育」をうけることが息子をほぼ確実に上の階層を移すことを可能にした。したがって、日本の「近代」は学校教育制度を導入することによって、男たちの心の中にいわば「フロンティア」を開いたのであった。そして母親たちは息子をこの「フロンティア」のなかに旅立たせなければならなくなった。江藤はここに教育熱心な母親の起源があると論じている。

しかし、一方、母親には、息子をいい学校に入れようとする努力が、息子を自分から離れさせ、結局、彼女と息子との肉感的な結びつきが破壊されることになるとい

う恐れがあった。この危機感が、母親の息子への心の傾斜に拍車をかけることになったという。また、息子は息子で、母親との粘着した結びつきを壊すまいとする。或は母親の秘められた願望を先どりして、学校を落第ばかりする。こうして母親の表向きの期待を裏切ることによって、母親のひそかな願望に協力しているといっても過言ではないという。つまり、「母親が『成熟』を呪詛している」とすれば、息子はいつまでも幼児のままでありたいと願っている。」したがって、そこには、「人が生きることは絶えざる喪失の過程を歩むことであり、それは一つの成熟の過程でもある」が、農耕文化の中で生きてきた日本人は「近代化」のために「母なる大地」が侵犯されつづけているにもかかわらず、なかなか自立した個人になることができないでいるのが日本の現状であるとすると彼の鋭い認識がある。そして、喪失を確認するところに成熟があり、したがって母と息子の肉感的な結びつきに頼っているかぎり、母にも子にも成熟はないという彼の見解は、今日よく指摘される日本の青少年の自我の未熟

さの原因の一つを照射したものととして注目にあたいすると思われる。
(津田塾大学)

